

# 【原著論文】 陳鶴琴と倉橋惣三の家庭教育思想の比較研究

張 薇  
天津工業大学

## A Comparative Study of the Family Education Thoughts between CHEN He-qin and Sozo KURAHASHI

Zhang Wei  
Tianjin Polytechnic University

In this paper, the author introduced the family education thoughts of Chen He-qin and Sozo Kurahashi, and demonstrated both different and same points of their thoughts.

From the result of the analysis, the following has been found out. First, both emphasize the importance of the family education and recognize the education characteristics that Family life has. Secondly, the most characteristic distinction of their family education thoughts is that Chen makes much of the education that the family performs at home and Kurahashi does the education characteristics that family life has.

Keywords: Chen He-qin 陳鶴琴, Sozo Kurahashi 倉橋惣三  
the Early Childhood Education 幼兒教育  
the Family Education 家庭教育

## はじめに

本研究は中国の陳鶴琴（1892-1982）と日本の倉橋惣三（1882-1955）の幼児教育理論についての比較研究の一環として、その家庭教育論を明らかにしようとするものである。

陳鶴琴と倉橋惣三は共に、アメリカに留学し、デューイをはじめとするアメリカの新教育理論を学び、帰国後、それを自国幼児教育の改革に意欲的に取り組み、独自の研究と実践を重ね、それぞれの独特な幼児教育理論を築き上げ、中国と日本の近代幼児教育理論の確立に多大な貢献をした人物である。

陳鶴琴と倉橋惣三の幼児教育理論について、筆者はこれまでの研究で、両者の目的論、方法論とカリキュラムの相違を明らかにした<sup>1)</sup>。だが、両者の幼児教育理論をよりよく理解するには、彼らの幼児教育理論の原点になる家庭教育についての思想を究明することが不可欠である。

そこで、本稿はこれまでの研究を踏まえ、両者の家庭教育論に焦点をあて、それを比較考察することにより、その共通点と相違点を明らかにしていくことを目的とする。

### 一 陳鶴琴の家庭教育論

#### 1 家庭の重要性

陳鶴琴は、デューイの「教育は即ち成長である」、陶行知の「生活は即ち教育である」という考えをさらに強め、「幼児教育は生活から離れられない。教育の目的は生活を改善・充実させることである。教育それ自体は生活であり、生活それ自体は教育である」と考えている<sup>2)</sup>。

陳によれば、幼児教育とは、社会教育と家庭教育を含むものである。例えば、映画、劇、絵本、玩具、遊戯場所などは社会教育に属するものであり、親の子どもに対する態度、養育、言語、行動などは家庭教育に属するものである。幼児教育は単に一般に思われた学校での教育だけでなく、家庭での教育もその内容である。したがって、幼児教育の目的を達成するため、社会、学校と家庭の三者は協力し合わなければならないのである、という<sup>3)</sup>。

陳は幼児教育での家庭の役割を重要視し、「子どもは生まれてから、親と家族の中で保護され、愛される。家庭の中で、家族に愛され、家族の暖かさを感じることは、子どもの感覚と感情の発達に極めて重要である。同時に子どもの個性が形成する基本は家庭にある。家庭が子どもの思想と行為習慣に与える影響は大きい」<sup>4)</sup>と述べている。

家庭には親や家族がおり、家庭生活には家族の愛情があり、その家族の愛情により、教育が生まれてくる。「親は子どもの初めての教師」であり、「子どもは、親から言語を学び、周囲の事物を認識し、親の言語行為を模倣し、親の影響の下で、性格を形成していく。だからこそ家庭教育を重視しなければならない」<sup>5)</sup>と陳は考え、家庭教育の重要性を強調しているのである。

#### 2 女子教育と家庭教育

家庭の中で、子どもと一番密接な関係をもっているのは母親である。子どもは随時随所に母親の態度や言動からさまざまな影響を受けている。よい教育を受けた母親は子どもにより影響を与えるのに対し、母親の悪い習慣や態度と言動などは子どもに悪い影響を与えがちである<sup>6)</sup>。

陳鶴琴は、母親そのものは教育性をもっており、その教育性は母親の受けた教育と関連していると考え、幼児教育はまず女子教育から始まるべきであると主張し、次のように述べている。「母親は女子の専門職である。今の女子は将来の母親であり、今の母親は過去の女子であった。現在の母親の教育水準は昔の女子教育の結果である。だから、将来の母親の教育水準は今日の女子教育の結果によるものである。つまり、幼児教育といっても、まず女子教育から始まる」べきである。女子教育は幼児教育の始まりであり、幼児教育は女子教育の延長線上にあり、「幼児教育の根本は女子教育である」<sup>7)</sup>というのは陳鶴琴の考えである。

幼稚園から大学まで、女子教育は存在しつづけるが、女子教育を行う上で、一番重要なのは中学1年生の時期であろう。なぜなら、それは女子の思春期であり、この時期において女子は女性らしくなり、母親の有する特徴もだんだん出てくるからである。

したがって、この時期に女子教育を行い、母親としての知識や技能を教えるのは最適である。そう考えている陳鶴琴は、当時の中国女子の中学進学率が低いことに鑑み、中学から女子教育を行うならば、女子の多くは女子教育を受けることができなくなるので、中国の現状から言えば、小学校の5年生または6年生から女子教育を行うのが最適である、と主張するのである。

人は結婚して、子どもを産んで、親になると思われるが、実際、子どもに良い影響を与えることができる親になるのはそれほど簡単なことではない。そうなるためには、まず子どもの心身の特徴とその特徴に即した子ども教育の方法を研究し、それらを身につけるべきである。

### 3 家庭教育の目的

陳鶴琴は、家庭教育は子どもの発達特性に即し、それを日常生活に浸透させ、子どもの知・徳・体の全面発達をはかるものであると考え、その目的を次のように説明している。

第一に身体の強健さである。子どもの発達特性に即した教育は、まず健康作りから始まるべきである。というのは、「強健な身体は子どもの幸せのもとであり、もし身体が健康ではなければ、子どもはもちろん一生苦しみ、そして親も極めて苦しむ」<sup>8)</sup>からである。陳によれば、衛生習慣は健康と密接な関係があり、健康づくりは、まず子どものよい衛生習慣から始まる、という。よい衛生習慣をつけるため、陳は25ヶ条原則を提唱し、歯磨き、顔洗い、手洗い、昼寝、食事の定時定量、排便定時などを日常生活に浸透させるべきであると主張する。

第二に情緒教育である。陳鶴琴の家庭教育論は、まず身体の保育に重点をおき、よい衛生習慣による健康な身体づくりを基本とし、その上で健全な精神の発達をはかろうとするものである。

陳は子どもの情緒教育を重視する。陳によれば、人との付き合い方、正しい礼儀、物を大切にす気持、親の手伝い、同情心、勤勉さなどの大切さを理解し、それらを身につけること、またそのために、子どもの健康な情緒を守り、暖かく、楽しい雰囲気を作ることは大切であるという。子どもの精神上の

悩みを和らげ、取り除くには、家庭での温かい感情と雰囲気や積極的な徳育教育は必要である。その方法として、子どもを楽しく遊ばせることである。そのために適当な遊具が必要であるが、子どもを喜ばせるのは、遊具より仲間、動物、水遊びの方が有効である。そして、遊具として「死」遊具（変化がなく、自由に遊べない遊具）よりも「活」遊具（自由に遊べ、動かし、変化に富む遊具）の方がよいという。要するに、正直、真面目、同情心、愛情などの育成は家庭教育の内容であり、その目的でもある<sup>9)</sup>。

第三に知育である。陳鶴琴は体育（子どものよい衛生習慣による体づくり）と徳育（子どもの情緒養成）を強調すると同時に、子どもの知的教育をも重視している。当然であるが、知的教育も子どもの発達特性に即して行なわなければならない。陳によれば、子どもの発達段階と心理特性に従い、それを保護し、よい環境を備え、子どもに経験を獲得させ、それを積み重ねることなどにより、知的教育が行なわれるべきであるという。

子どもに知識、経験を獲得・蓄積させるため、子どもがさまざまな遊びをすることを励ますべきである、と陳鶴琴は主張し、次のように述べている。子どもは生まれつき遊びが好きであるから、子どもに自由かつ十分に運動させるために、親はよりよい設備と環境および適当な仲間づくりのチャンスを提供し、子どもによく運動させ、よく遊ばせ、よく経験させるべきであり、そうすると、子どもの体はより強健になり、気持ちが楽になり、知識が獲得され、思想も活発になる<sup>10)</sup>、という。

陳鶴琴によれば、親が提供すべきよい環境には、遊び環境はもとより、音楽や美術芸術環境と勉強環境も含まれるのであり、そして、子どもによい環境を与えたら、子どもに経験させるのは最も重要である、という。陳は、親の過保護、子どもの代わりに何でもやってあげてを反対し、子どもにできることをやらせ、親にお手伝いできることを手伝わせることの必要性を主張し、それらより、子どもの筋肉の発達、労働意欲の養成、自立能力の鍛錬などができるからであると考えているのである。要するに、子どもの知識の獲得、知力を伸ばすことにおいては、親などの外部からの働きかけより、自分自身の経験・

体験の方がより重要である、というのは陳の考えである。

つまり、陳鶴琴の家庭教育論は子どもの発達特性に即した基本教育であり、すなわち、子どもの知・徳・体の全面発達を図ろうとするものである。それは、まずよい衛生習慣による子どもの身体を健康にすることから始まり、その上で、子どもの健全な精神発達と情緒の養成をはかり、最後に、子どもの発達特性に従い、それを保護し、子どもによりよい環境を提供し、子どもに経験させることにより、知識の獲得、自立能力の鍛錬をはかるものである。

#### 4 家庭教育の原則

『家庭教育』（1925年）において陳は、101ヶ条の家庭教育の原則を提出したが、それは次のようにまとめることができる<sup>11)</sup>。

第一に親が模範を示すことである。子どもは模倣が好きで、模倣が得意であるから、親の言動のすべては子どもの模倣の対象になる。そのため、親は日常生活中での自分の言動に十分な注意を払い、子どもに模範を示すべきである。

親は命令的口調と言葉で子どもを指示したり、「だめ」などと言ったりしてはいけない。なぜなら、命令や訓戒とか小言とかは教育にならないからである。

言葉や行動のみでなく、態度や考え方においても親は、模範を示さなければならないのである。「子どもは善悪をあまり区別できないし、また知識も少ないので、物事を模範する際には、善悪を選別しない」のである。したがって、親はどこでも子どもに模範を示し、よりよい環境を提供すべきであり、そして、よいことあるいは悪いことに対する親の態度を明示しなければならない。要するに、言葉や行動および態度や考え方などのすべてにおいて親は模範を示さなければならないのである。

第二に興味を誘い出すことである。子どもに教育を行うには、その興味を誘い出すのが重要である。子どもは褒められることが好きであるが、責められることが嫌いである。したがって、教育を行う際、親は積極的な暗示という方法を使い、子どもにやるべきこと、やってはいけないこと、注意すべきことを示す必要がある。また、子どもの長所や出来たこ

と努力などを積極的に励まさなければならないのである。子どもを褒めることで、子どもの興味を誘い出し、子どもの自信や向上心と好奇心を強めていく。そうすれば、教育にはよりよい効果が出てくる、と陳鶴琴は考えている。

第三に教育のバランスである。教育のバランスとは、親の子どもに対する愛情と保護が必要であると同時に、厳しさも必要であるということである。教育において、子どもを放任してはいけなし、子どもに干渉してはいけないことは重要である。陳鶴琴によれば、子どもの自己能力と自己意志を充分発達させる一方、子どもの自由な範囲を制限し、随意行動をさせないというのは適切であるという。

また、教育に対する両親間の判断基準において両親の一致性も要求されている。家庭では、子どもに父親の方が厳しすぎるのに対し、母親の方が甘すぎるといふことがある。両親の要求レベルは一致しないので、子どもが誰かに従うか分からなくなり、教育の効果も低下する。

第四に親の要求レベルが適切なことである。適切というのは、親が子どもの年齢や発達段階と能力に応じてその発達特性に即す教育を行うということである。親は子どもに何か要求したり、何かさせたりする場合、必ずその年齢に応じてその能力範囲内で行われなければならない。適切でない難易度の要求は子どもの発達と成長を損なうことになる。

#### 5 家庭教育と幼稚園・学校教育とのかかわり

幼児教育にはなぜ幼稚園が必要なのかについて、陳鶴琴は下記のように説明している<sup>12)</sup>。

第一に子どもの心理特性によるものである。子どもは仲間が好き、集団が好きであり、その年齢が高ければ高いほど、仲間がほしくなり、家庭では彼らのこうした欲望をなかなか満足できない。だが、幼稚園では沢山の仲間がいるから、それを満足できる。また、子どもは遊びが好きであり、これによって多くの知識を獲得し、多くの技能を学ぶことができ、体の発達にも役に立つのである。だが、経済面や活動スペースの制約などのことで、家庭では子どもに十分な玩具を提供できないし、遊んでくれる仲間が足りない、あるいはいないので、子どもは十分遊ぶ

ことができない。子どもが十分遊べるのは幼稚園でしかできない。

第二に子どもの発達特性によるものである。子どもは将来の社会でよりよく生きていくため、多くのものが必要であるが、その中で一番重要なのは個性の発達であろう。子どもの個性を十分発達させるには、強健な体、十分な知力、調和と協力できる社会性が必要である。これらは家庭でも行われているが、家庭だけで十分ではない。強健な体作りやさまざまな技能の習得は完備な設備や良好な環境を必要とし、知識を系統的に習得するには専門職が必要であり、調和能力と協力性及び集団性などの社会性の養成は集団の中で行われるべきである。こうしたことができるのは幼稚園である。

第三に家庭教育を補強する一方、家庭教育の不足を補うことである。幼稚園は家庭と密接な関係を持ち、家庭と協力し合って教育を行うのであるが、家庭も幼稚園を必要とする。子どもの世話をしたり、子どもに教育をしたりするには、時間もエネルギーも必要である。実際、多くの親は十分な時間やエネルギーをもっていないのが社会の現状である。幼稚園があれば、子どもは幼稚園で遊んだり勉強したりすることができる。そして、親の育児の時間を節約することができる。

さらに、幼稚園は家庭教育の不足を補うことができる。たとえ親が子どもに教育を行う十分なエネルギーと時間があっても、子どもの協調性などの社会性および公民精神の養成、系統的な知識の習得などは、幼稚園を必要とする。その意味で幼稚園教育は家庭教育の不足を補うことになる。

第四に小学校教育の基礎である。家庭は最初の教育の場であり、親は最初の教師であると考える陳鶴琴は、家庭教育を幼児教育ひいてはすべて教育の基礎とし、家庭教育を重要視している。陳鶴琴は「幼児教育は複雑なものであるので、家庭だけではできないし、幼稚園だけではできない。両者が協力しないかぎり、十分な効果をあげることはできない」<sup>13)</sup>と述べ、家庭教育と幼稚園教育との連携の重要性をも強調するのである。陳によれば、家庭教育は個別に行われ、子どもの体作りや情緒教育はその主な内容であるのに対し、幼稚園教育は集団的に行われ、

子どもを発達させるのはその主な内容である、したがって、両者は協力しなければならない、という。

陳は家庭教育を幼稚園教育の基礎と出発点としながらも、さらに一步を進んで、それを学校教育に近づけようとし、「幼稚園では、小学生のように教えることを望まないが、いろいろな経験から見て、幼稚園教育は少なくとも一年か二年かの科目の一部分を教えることができる。例えば、自然、描画、常識などのような科目は幼稚園で教えることができる」<sup>14)</sup>と主張している。

## 二 倉橋惣三の家庭教育論

### 1 家庭教育の重要性

倉橋惣三は、「人類の発明したものの中で、家庭ほど意義の深いものはない」、家庭は人間が人間らしく生きるための最高の「生活形式」であると考え、この家庭こそ、子どもが生まれ、育てられる居場所であり、離れられないところであり、「家庭こそ幼児教育の本拠」であると主張している<sup>15)</sup>。

「幼児期の教育総説」<sup>16)</sup>において倉橋は、「家庭は人間生活の全体にわたっての本拠である。何も幼児に限ったことではない。ことに、子どもの教育の中心が家庭教育であることは言うまでもないことで、幼児教育に限ったことではない。しかも、幼児期こそ、一番家庭を本拠とし、家庭の力なくしては育てあげられないときだといってよい」と述べ、家庭教育の重要性を強調している。さらに、家庭教育において何より一番大事なのは「母の愛」であり、「家庭は母の愛のあるところとして、幼児のために欠くことのできないところである。すなわち、幼児教育のためには、家庭の充実の根本としての母の愛を十分発揮させることが何よりの先決問題である」としている。また、幼児期は心身が未分化であるので、幼児への教育においては、心の教育と身体の教育を区別しないのが一般的である。したがって、「幼児期において、教育的留意が必要だからといって、教育を教育として抽象的に行ったりすることはまだその時期ではない。どこまでも、日常の生活の中で、生活の形で行ってゆくべきものである」。倉橋によれば、このような教育は家庭でしかできない、なぜな

ら、家庭は生活であり、家庭教育の真諦は生活教育であるからである、という。

## 2 家庭教育の内容

では、家庭教育とは何であろうか。これについて、「家庭教育」<sup>17)</sup>において倉橋は次のように述べている。「家庭教育といふ言葉が二つの意味に用ゐられる。第一は、家庭それ自體の裡に自然に存在する教育、第二は、家庭に於て特に施行せらるゝ方法によつて行はるゝ教育である」。ここで、倉橋は家庭教育に二つの意味をもたせたのである。だが、「世俗一般の傾向として、家庭教育を此の第二の意味に於てのみ偏し考へる風が多く、その為、家庭教育が重んぜられて却て家庭教育失はるゝといつたやうな結果をさへ生じたりする」。

倉橋は家庭教育に関する世俗一般の考えを批判し、その誤った考えの原因を次のように分析している。第一に、学校教育では教育概念がよく考えられるため、学校教育の本義はすなわち方法による教育であるから、家庭教育を家庭において行われる方法教育と考えやすいことになる。第二に、現代において学校教育が児童の教育の中軸を占めているため、教育の基本であるべき家庭は学校教育に従属させられ、結局に家庭教育は学校教育の僕としてみられる。第三に、上記のことより、根本的なものは人生において家庭生活の意義そのものに対する認識の不足である。その上で、倉橋は家庭教育の本義は家庭生活それ自体に自ずと存在する教育性の発揮であることを強調する。倉橋によれば、「家庭自身がつ教育的価値を充分発揮することで、家庭生活のすべてが家庭教育の最も大切な要素なのであります」<sup>18)</sup>という。

## 3 家庭生活の教育性

「家庭と家庭教育(二)」<sup>19)</sup>において倉橋は、「家庭生活そのものゝ有する教育性」は「特に計画的に施行するといふよりも、おのづからに、家庭生活から与へられてゆく教育効果である」と強調している。では、家庭生活の有する教育性とは何であろうか。倉橋によれば、家庭生活の具有する教育性はとは二つの意味をもっているという。その一つは、「その

家庭が子どものために特に調子の高い教育的要件を具備し、教育的環境として理想的なものである場合である」。それは望ましいことであるが、一般の家庭にとって難しいことである。もう一つは、「これ等の所謂教育的条件を離れて、もっと、家庭生活さながらの裡にその教育性を発見しなければならない。而して、それが極めて潤沢に自然の事実として存在してゐるのである」。「生活そのものゝ場所であるところの家庭には、どこまでも真実でありのまゝの外のものが存してはならない」。

要するに、「家庭生活の教育性といふものを、家庭生活そのものゝ自然の生活事実さながらの中に見出して、その存分の作用と効果とを家庭教育の第一本質として考へてゆきたい」というのが倉橋の考えである。

倉橋は家庭生活の人間性、現実性、理想性と限定性を挙げ、それを家庭生活の教育性として説明する。

## 4 家庭生活と人間性

倉橋によれば、「家庭生活のすべてが家庭教育の最も大切な要素」、家庭生活は「人間の創る生活で、人間相互の交りを源として、人間交渉の行はれること」<sup>20)</sup>であるという。家庭での「人間交渉」は家庭生活の本来的な内容であり、それは、親子、家族同士の相互の間に行われている打算のない純人間的な接触である<sup>21)</sup>。

人間は人間交渉により人間となるので、子どもが家庭に生まれ、家庭に育つことによって人間性を養われる。「人間性を本当に育てあげるには、人間交渉なしで出来ない」が<sup>22)</sup>、その人間性を養うのはただ家庭生活だけでなく、社会生活においても行われる。それは人間交渉の中には、不純な人間交渉と純粋の人間交渉の二つがあるからである。不純な人間交渉の間に練磨されていくことが大切であるが、柔らかい、弱い、純粋な可憐な子どもに「先づ家庭で、範囲の小さい、静かな、殊に自然味に充ちた人間交渉の機会をもつことは、子どものためにもつとも深い意義をもつ事である」。要するに、「家庭生活における人間交渉は、人間的にもつとも真実なものであるのみならず、極めて多様の方面をもつてもある。しかも、いづれも、人間的に眞純率直なる

関係」というのである<sup>23)</sup>。

家庭は純人間交渉の場所であり、家庭における人間教育の真諦がここにある。すなわち、純人間交渉は愛することと愛されることによって行われていることであり、家庭教育は、親の愛を前提とするものである。親の愛によって行われる日常生活は家庭教育の本義である。

家庭における人間交渉のもう一つの特徴は、各員相互の交渉の外に、家庭を中心とした生活協同が行われていることである。こうした生活協同は子ども達が意識することもないし、ある目的のため一致協力に行なうこともない。要するに、家庭における生活協同は、目的のあることや義務、役目と特別な道徳でもなく、それらのためのものでもない、自ずからの心の喜びとして始終なされていることはその顕著な特徴である。

以上のような純人間交渉は家庭教育の第一要義である。

## 5 家庭生活と現実性

倉橋は、家庭生活の現実性を家庭生活のもつ第二の教育性としている。倉橋によれば、家庭はどこでも現実の生活事実であり、その本質は物的要件、社会的要件と公務的要件を離れては存在しえないという。つまり、「生計の資となるべき収入、収入のための勤労、生産、計画的に営まれてゆく消費、及び、社会生活の一単位として、国に対し、市に対し、町内に対し、隣近所へ対しての、様々の実際の交渉、一日もこれ等の現実を離れて存在してゆくことは出来ない。而して生活の現実性を知ることは、人間教育の大切な要義であつて、これを缺くものは、空な抽象的な生活者となるの外はない。そのもつとも大切な教育が、家庭生活の現実性そのものによつて、おのづから行はれてゆくのである」<sup>24)</sup>。

要するに、子どもは家庭という現実的な生活の中で、人生現実を体験することにより、現実性を養われ、現実性の所有者として育てられてゆくべきである<sup>25)</sup>、と倉橋は考えている。だが、子どもは成人と同じような現実と直面しているわけではない。なぜなら、「それに大人と同じやうな現実を強ひることは、子どもらしい幸福を奪ふことであり、また、子

どもの自由な成長を妨げるものであつたりする」からである。したがって、家庭生活の現実性について、「強ひるともなく、教ゆるともなく、子どもに、人生の現実味を知らせてゆく事実には、大切な教育価値を認めなければならぬ」<sup>26)</sup>、と倉橋は主張している。

## 6 家庭生活と理想性

倉橋は、家庭生活のもつ教育性の第三として、理想性を挙げ、それを次のように説明している<sup>27)</sup>。「美が求められ、真が敬せられ、善が尊ばれるのは人間至情の一つであつて、事務の繁忙や生活闘争の劇甚やいろいろの事情によって、それが忘れたり、失はれられたりすることはあつても、人間性の自然の裡には決して捨て去らるゝものではない。而して、人間の最も自然の境地である家庭内に於ては、それが意識的に、或は無意識にあらはれてくる筈である」という家庭生活の中に、理想が存在する。

家庭における理想は二つの意味をもっている。第一の意味は、自己の理想そのものの内容を向上させていくことである。倉橋によれば、親のもつ理想とその理想実現のための努力が子どもに大きな教育力をもつという。倉橋は言う。「この自己の理想努力が親に存在する時、それが子ども達の上に影響して、理想性の教育を与へてゆくことは勿論である」。「親に理想上の努力さへあれば、大きな教育効果をもつのであり、また、その理想努力の過程こそ、我子に理想努力の過程を促す、大きな力となるものである」と。

家庭における理想性の第二の意味は、親のもっている理想をその生活に実現したいという心である。この理想化はもっとも具体的なものである。さらに「この理想化は、実現の実行の外に、生活批判としても行はれる」ということである。その生活批判によって、子どもの心に、現状から理想への向上する傾向を教育していくのであり、これも家庭生活から与えられる理想性教育である。

## 7 家庭生活と限定性

「家庭教育」<sup>28)</sup>という論文において倉橋は、家庭生活の限定性を教育力の一つとして挙げている。家庭生活の限定性とは、各々の家庭は個性をもち、こ

うした家庭のもつ個性はその家庭の子どもの発達に限定的作用をもつということである。家庭生活の限定性とその教育力について、倉橋は次のように説明している。

「各家庭がもつ個性は恰かも一つの社会が其の特有の社会意識なるものをもつと同じく、其の家庭独自の特有な生活意識となつて、家族各自の生活を支配する。それが最も明確な客観的存在をとつた時家憲となり、客観的にそれ程明確でないが家風となり、家族の、感じ方、考へ方、行ひ方の上に一定的な方向を限定し来る」。もちろん、こうした個性の内容は必ずしも常に優秀なものまたは時代に即するものでないかもしれない。しかし、個性内容の如何にもかわらず、その限定的作用が子どもに与えられることは、子どもの発達、特にその性格形成にとって教育原理において必要なことである。その意味において、家庭生活の個性、限定性は確かに貴重な家庭の教育性である、と倉橋は考えている。

## 8 親の周到さ（熱意と実行）

家庭生活そのものは教育性を持ち、「家庭生活として真に充実して居る家庭では、立派な教育効果があればいいものだ」というのは倉橋の考えであるが、それは家庭における教育の努力が必要でないという意味でない。なぜなら、家庭教育の一面は生活そのものであり、もう一面はどこまでも親の仕事で、それは「意を凝らし、力を尽くして、工夫もし、手段も講じてゆかなければならぬはたらきである」からである。「その一切の根底となるものは、親の周到である」。

家庭教育には親の熱心さが必要であるが、実際に、それが必ず十分ではなく、親の周到さも必要である。「教育的周到といふことは、たゞ漠然たる熱心ではなくて、必ずその実行の伴ふものでなければならぬ」のである。それは容易でない。なぜなら、「子どもの教育は、時々思ひ出したやうにして済むものでなく、細心に、不断に、一刻も親の心から離れてはならないから」である。

子どもの教育に熱心でも、実際に周到さというものをもたないこと、子どもにただ心配だけで、適切な指導や対応が行わないこと、子どもにお金だけか

けて、教育は人任せということは、本当の家庭教育にならない。また、周到さは干渉という意味ではないが、家庭教育に教育的周到さを過度の干渉と取り違えること、世話の焼きすぎになることを注意すべきである。要するに、周到さというのは「子どもの自主性の発達、殊に、子ども相当な自主の要求といふものを尊重してやらなければならない」のである<sup>29)</sup>。

## 9 子どもの理解

教育は子どもへ向かって行なうことであり、「子どもを中心とし、本位として、それに応じて行はれてゆかなければならない」。だが、子どもが実際どうあるかを正視しない若しくはできない親がいる。家庭教育の場合に、親なればこそわが子が昏いところもあり、わが子というところから、親の要求が勝ち過ぎて却って正しい理解が失われ易くなるからである。

子どもを理解することは教育における第一の任務で、その理解の上で、とりあえず子どもを知ることが大切であり、わが子を知るのには親でなければならぬ、と倉橋は考えている。倉橋は言う、「家庭教育そのもの、責務としては、我子の理解こそ、第一の任務でなければならぬのである。」「我子が、どうなるであらうかばかりが教育の注意点ではない。我子がどうあるかに教育の第一の注意点がなければならない。而して、その点こそ、その子の家庭の第一の役目でなければならない。医者は治療して呉れる。しかし、我子の体質を知つてゐるのは親でなければならない。教育に於ても同様である」と。

では、「理解」とは何か。「理解ということは、つまり相手として見る客観的態度を要するもの」であり、それは「一般的理解だけではない。教育の方法の上からいつて、我子の年齢的特色といふやうのことに對しても、正しい理解をもたなければならない」。

家庭教育には、子どもの「年齢的特色」に応じて、子どもを理解するのは非常に重要であり、それは「子どもの生活が、その年頃によつて、大に、寧ろ本質的に異つてゐる」からである。だが、実際、家庭の場合において、二つの矛盾した誤りを犯しやすいのである。それは「早く発達させ度いといふ希望から

は、年齢以上の要求を以て望み勝ちになり、幼い時から愛撫してある心持ちとしては、いつまでも年齢以下に取り扱つたりする」ということである。倉橋によれば、子どもを理解することを十分注意していけないということ、すなわち、「きびし過ぎたり、あまやかし過ぎたりするのがその結果である」という。

したがって、子どもを理解するには、親が子どもを研究する必要がある。倉橋によれば、「親が、子どもの研究をするのは、児童というものを学問的に知るためではない。その知識を以て我子を知るためである。学問を基礎として、自ら我子の世話を凝視し、愛に昏まない。間違ひのない理解をするためである」という。そのために親は教育的知識と能力を十分に具えなければならない<sup>30)</sup>。

#### 10 家庭教育と幼稚園・学校教育とのかかわり

幼児教育の本義、そして方法の原則から言えば、あらゆる要件を備えている場所は家庭であり、家庭教育は幼児教育のもとである。倉橋によれば、「その子の教育のもとであり土台となつてゐるものは、何んといつても家庭教育である」。なぜなら、「そこに生まれる。そこに親がゐる。そこに生活する」からである<sup>31)</sup>という。だが、幼児教育は家庭だけでなく、また家庭だけができるものでもない。家庭と幼稚園・学校は教育においてどちらも大切であり、バランスを充分に取れないと、崩れてしまう。

学校教育と家庭教育の両方は大切であるが、家庭教育こそ教育のもとであり、学校教育の土台であり、その家庭教育の土台の上にその延長していくところに幼稚園・学校教育がある、というのは倉橋の考えである。

幼児教育での家庭と幼稚園・学校との関係について、倉橋は次のように述べている。「幼児期教育の要件を、こんなに理想的に具へてゐるところは、家庭の他にはないのである。勿論、幼児期教育のために施設せられてゐる教育機関、即ち幼稚園にも多くの価値がある。幼児期教育の専門的研究と多年の経験とによる幼稚園の教育作用は確に、一般の家庭教育を補ふものである。殊に、選ばれたる友達との生活を存分になし得る点に於ては、家庭にない教育性

がある。しかも、幼児教育の本来の要件を充たす点に於て、家庭に越すものはないのである」<sup>32)</sup>。

ここでは、家庭は幼稚園教育の本拠と土台であるが、これだけで完全でなく、それを補うものが必要である。それは幼児教育のために設置される教育機関である。幼稚園と学校には家庭にない教育性があり、それは、一般家庭教育ではできないところを補うという性質をもっている。だからこそ、欠くことはできない大切なものである。だが、幼稚園・学校は補助機関で、家庭を越えるものではない、と倉橋は「家庭と家庭教育(二)」<sup>33)</sup>において強調している。

子どものために、よりよき教育を求め、家庭、幼稚園、学校の三者は協力しなければならない。幼稚園、学校は「家庭だけで出来ない教育を充実させるために、進んで活用してゐるものである。言ひ換えれば、家庭は、それ等の教育に對して、受動的な関係でなく、発動的な関係である。況や、任せつきりのものでなく、いつしよにしてゆく教育である」。要するに、幼児教育において、家庭が「受動的」でなく、「発動的」であり、家庭の責任を放棄し、一切幼稚園、学校に任せることはいけないが、よい教育のために、幼稚園・学校の教育はよい家庭教育を俟つこともいけない。家庭は幼稚園と学校の協力者としなければならないのである。

幼稚園教育は家庭教育の延長であり、家庭教育はさらにもっと広くて、延長し、社会教育の利用というところまで進んでいくべきである。倉橋によれば、「子どもの教育は家庭がもとだといふ言葉は、我子の教育の核心だといふことで、家庭教育が単独の、教育的に自給自足的の存在だといふ意味ではない。どこまでも社会全体の中にあるものとして行はれてゆくのである。殊に現代に於て、社会と家庭との関係は密接になつて来てゐるので、この点に充分の理解がなくては、現代の家庭教育者として未だ充分のものといふことは出来ないのである」という。

家庭教育は社会性をもち、家庭生活と子どもの生活全体という社会の全体の中に行なわれていくのは倉橋の考えである。

### 三 考察

#### 1 家庭教育の理念

陳鶴琴と倉橋惣三は共に家庭教育の概念を拡大させ、広義的に家庭教育という概念を使っている。両者にとって、家庭教育とは家庭での生活、教育、養育、保育、産育などの意味を含むものである。

親の子どもに対する態度、養育、言語、行動なども家庭教育であると示したように、陳は家庭教育を広義的に捉えているのである。親の態度や言動などは日々の家庭生活に存在するので、家庭生活そのものは教育性を有すると陳は主張している。陳は、「教育それ自体は生活であり、生活それ自体は教育である」と考え、家庭生活の教育性を強調する。陳によれば、家庭には、親がおり、家族がおり、家族の愛があり、その家族の愛により教育が生まれるのであり、子どもは親の愛の下で言語を学び、周囲の物事を認識し、親の行為を模倣し、親の影響を受け、その性格を形成していく、という。

倉橋も家庭教育という言葉には二つの意味があると考えている。一つは家庭それ自体に自然に存在する教育であり、もう一つは家庭において特に施行される方法によって行なわれる教育である。世俗一般の傾向は二つ目の意味の教育に偏っていると考えがちであるが、倉橋は一つ目の意味を重視し、家庭生活そのものにある「生活事実」における教育性が存在することを強調する。いわゆる「生活による教育」のことであり、家庭生活自体の中に自然に存在する教育である。

二人とも家庭教育という概念を広義的意味で使い、家庭教育を重要視していると同時に、家庭生活には教育性が存在すると強調している。その教育性は家庭各員の人間交渉、特に家庭内で教育の主体である母親の愛をはじめとする教育性を前提とするものである。

家庭教育を重要視し、家庭生活が教育性をもつことは陳と倉橋の共通した認識であるが、家庭生活の教育性について、両者の間に認識の相違が出てくる。

陳の場合、家庭生活の教育性を重視する一方で、特に強調したのは家庭で行われる教育ということである。すなわち、教育者である親は家庭において、

教育目的を意識し、家庭生活の教育性を利用し、子どもに教育を行い、それにより教育の目的を達することである。その場合、陳が最も重視したのは、子どもの心理・発達特性を理解し、それに即して子どもに教育を行なうということである。

陳は、生活習慣、社会道徳を幼児期より習得させることを家庭教育の主な内容とする。これは子どもの家庭生活において、生きる技能を習得させようとしているのである。そのためには、家庭において親自身が教育性をもっているから、一層親になる資格を要求しているのである。親が教育目的を意識されないままでは、家庭で、子どもを教育することができなくなる。

それに対し倉橋は、家庭教育はただ家庭それ自体に自然に存在する教育であると強調し、この家庭教育は親に教育の意識があろうがなかろうが問わずに、教育意識のないところにも教育の事実も結果もあると考えている。倉橋は、家庭生活の人間性、現実性、理想性と限定性から家庭生活そのもの、そのさながらのままの教育性を説明し、家庭教育が特別に実行することなく、その効果は家庭生活から与えられたものであると強調している。

#### 2 家庭教育と幼稚園・学校教育とのかかわり

子どもにとって、親は最初の教師であり、家庭は最初の教育場であるというのは陳鶴琴と倉橋惣三の共通認識である。両者とも、家庭教育は幼児教育の基礎であり、幼稚園も学校も家庭教育の延長と拡大であり、家庭教育こそ幼稚園・学校教育の起点であると主張する。また、幼稚園教育は家庭教育を補うという性質をもっているが、幼稚園教育は決して家庭教育の代理となるものではない。教育の方法として、子どもの自発性を尊重し、子どもの発達特性に即して子どもの興味や自発性を誘い出すべきである。そして、子どもの教育では、家庭と幼稚園・学校は互いに協力しなければならない。というのは陳と倉橋の共通の考えである。

しかし、陳の場合、家庭教育と幼稚園教育は違うと考えているが、家庭教育は個別に行われ、子どもの修養と個性の形成を重点とするのに対し、幼稚園教育は集団的に行われ、子どもを発達させること

が目的である。幼稚園では、教師の指導により、勉強ができ、集団性・社会性・公民性を養うことができる。

陳は家庭教育を幼稚園教育の基礎と出発点としながらも、幼児教育はあくまでも家庭教育を越え、さらに進み、学校教育に近づけ、学校志向を目指そうとするものであると主張している。

しかし、倉橋の場合、家庭教育は土台であると同時に、その土台の上にその延長していくところに幼稚園・学校教育があると考えている。もちろん幼稚園にも多くの価値がある。倉橋によれば、幼稚園は家庭教育を補うことができ、とくに友達と生活を充分になし得る点において、家庭にない教育性がある、という。しかし、それは補助機関であるので、家庭を越えるものではないものである。

倉橋は家庭・幼稚園・学校の三者の協力関係を強調する一方、幼稚園・学校は家庭だけでできない教育を充実するために、活用しているものであるとしている。倉橋は言う。それらの教育に対し家庭は、受動的な関係ではなく、発動的な関係であり、任せるものではなく、一緒にしていく教育である。家庭教育は教育の核心とするものである。学校・幼稚園教育は家庭教育の延長上に補助機関として存在する。幼児教育は家庭志向を目指すものとするのである。

また、幼稚園教育は家庭教育の補助であるということ、陳と倉橋は異なっている。

陳にとって、幼稚園での教育が家庭の教育を補う意味は、親が時間やエネルギーの不足によってできなくなったことを補うことではない。この点では、家庭補助ということをごのような意味合いでも使っていた陳と倉橋は異なっている。陳の場合は家庭ではできない幼稚園独自のもの——集団性・社会性・公民意識の陶冶をすることが、家庭を補うという意味である。換言すれば、補うという意味は倉橋では本来家庭にあるものが欠落してしまった（母親の仕事によって教育が家庭でできなくなった）ために、補うという意味である。それに対し、陳では、もともと家庭にないもの、またはできないもの、それをすることが補うという意味である。

陳と倉橋は同時期のアメリカに留学し、当時の新

教育論を学んでそれぞれの自国で発展させたが、両者の理論には、共通したものがある一方、異なったものもかなり存在している。二人の思想に差が生じた主な理由として、日中両国の伝統文化とそれに由来する教育観、陳と倉橋それぞれの社会・家庭背景、などが挙げられる<sup>34)</sup>。また、それは、陳と倉橋が中国と日本のそれぞれの実情に合わせて、自己の思想を意図的に変化させた結果であると言えよう。外国に学ぶ場合、学ぼうとするものを自国の実情に合わせて取り組んでいくのは最も重要であると考えている。

ここ数年、イタリアのレッジョ・エミリア市の幼児学校でのプロジェクト・アプローチといわれる実践が世界的に評価され、中国にも日本にも紹介されている。だが、プロジェクト活動というのは、20世紀のはじめ、アメリカで実践され、中国にも日本にも紹介・実践されている。したがって、プロジェクト・アプローチはどの程度でプロジェクト・メソッドを超えたのかについて、再検討する必要があるのではなかろうか。中国でも日本でも、外国のよいところを取り入れていくには、これまでの保育実践をふまえ、それをどう発展させていくのかという観点にたつのが大切であると思われる。

## おわりに

本稿では、中国と日本の近代幼児教育思想の確立に大きく貢献した陳鶴琴と倉橋惣三の家庭教育論を考察することにより、主に次のことを示すことができた。

第一に、陳と倉橋は、家庭教育は家庭生活そのものに存在する教育と、家庭で行われる教育という二つの意味を有すると考える。

陳の場合、家庭生活の教育性を重視する一方で、特に強調したのは家庭で実行される教育である。その場合、陳が最も重視したのは、子どもの発達特性を理解し、それに即して教育を行うことである。陳の家庭教育論は子どもの発達特性に即して、子どもの知・徳・体・美の全面発達を図ろうとするものである。それは、子どもの心理・発達特性に即して、まずよい衛生習慣による子どもの身体を健康にする

ことから始まり、健康な身体の上に立ち、次に子どもの健全な精神発達を図り、最後に、子どもの発達特性に従い、それを保護し、子どもによりよい環境を備え、子どもに経験させることにより、子どもの知識の獲得、自立能力の鍛錬を図ろうとするものである。

一方、倉橋は家庭教育を重視する際、家庭で実行される教育に反対して、家庭生活そのものの教育性に着目する。その家庭生活の教育性とは、「純人間的交渉」、「家庭生活の現実性」、「家庭生活の限定性」というものである。それは、現実的な生活を貫ぬく家庭生活の中での生活意識、および情緒的な人間的諸関係を強調している。

第二に、家庭教育と幼稚園教育の関係について、陳も倉橋も家庭教育が幼児教育の原点・基礎であり、幼稚園教育がそれを補うものであるとしている。だが、補うという意味において、陳は倉橋と異なっている。陳の場合は、家庭ではできない幼稚園独自のものを補うことである。いわゆる社会性の陶冶をすることが、家庭を補うという意味である。それに対し、倉橋では、本来家庭にあるものが欠落してしまったために、それを補うという意味である。陳は家庭を幼児教育の最初の場としており、家庭教育、幼稚園教育、そして学校教育を子どもの成長のプロセスとしている。

要するに、陳にとって、幼児教育は家庭教育を出発点としながら、あくまでも家庭教育を超え、さらに進んで学校教育に近づけようとするものである。一方、倉橋は「就学前教育の本拠は家庭にある」、「家庭が幼児教育の本質的場所」であり、したがって、幼児教育施設はあくまでも家庭教育の補助機関だと考え、家庭教育を幼稚園教育のあり方にまで押し広げようとした。つまり、倉橋にとって、幼稚園は制度上・保育方法上において家庭教育の延長上に構想されているものである。

## 引用文献

1) 拙稿「幼児教育における方法論の比較研究—陳鶴琴と倉橋惣三を中心に—」(『金城学院大学大学院人間生活学研究科論集』第4号, 2004年3月), 「幼児教育における目的論の比較研究—陳鶴琴と

倉橋惣三を中心に—」(同誌第5号, 2005年3月), 「陳鶴琴と倉橋惣三の幼稚園カリキュラム論の比較研究」(同誌第8号, 2008年3月)を参照。

- 2) 北京市教育科学研究所編『陳鶴琴全集』第2巻(江蘇教育出版社, 1989年), 674頁。
- 3) 前掲『陳鶴琴全集』第4巻, 407-408頁。
- 4) 前掲『陳鶴琴全集』第2巻, 662頁。
- 5) 同上書, 662頁。
- 6) 同上書, 877頁。
- 7) 同上書, 877-878頁。
- 8) 同上書, 761頁。
- 9) 同上書, 818-819頁。
- 10) 同上書, 866頁。
- 11) 北京市教育科学研究所編『陳鶴琴教育文集』(北京出版社, 1983年), 611-741頁。
- 12) 前掲『陳鶴琴全集』第2巻, 17-22頁。
- 13) 同上書, 112頁。
- 14) 同上書, 20頁。
- 15) 日本両親再教育協会編『子供研究講座』(先進社, 1928年9月)第1巻, 41-43頁。
- 16) 『倉橋惣三選集』(フレーベル館, 1967年)第4巻, 248-252頁。
- 17) 倉橋惣三「家庭教育」, 『岩波講座 教育科学』(岩波書店, 1932年)第10冊, 3-6頁
- 18) 倉橋惣三「家庭生活の教育的価値」, 『婦女新聞』, 1926年10月24日。
- 19) 前掲『子供研究講座』(1928年11月)第2巻, 37-42頁。
- 20) 同注の18)。
- 21) 前掲『子供研究講座』(1928年11月)第2巻, 42頁。
- 22) 同注の18)。
- 23) 前掲『子供研究講座』第2巻, 43頁。
- 24) 同上書, 48-49頁。
- 25) 前掲『岩波講座 教育科学』第10冊, 10-11頁。
- 26) 前掲『子供研究講座』第2巻, 49-52頁。
- 27) 同上書, 55-56頁。
- 28) 前掲『岩波講座 教育科学』第10冊, 12-13頁。
- 29) 前掲『子供研究講座』第2巻, 57-67頁。
- 30) 倉橋惣三「論説」, 『倉橋惣三選集』(1985年版)第4巻, 252頁。

- 31) 倉橋惣三「家庭教育と学校教育」, 石川松太郎  
監修・解説『家庭教育文献叢書 15』(クレス出版,  
1990年), 2-3頁。
- 32) 前掲『子供研究講座』(1928年)第3巻, 107頁。
- 33) 前掲『子供研究講座』第2巻, 67-74頁。
- 34) 拙稿「幼児教育における目的論の比較研究—陳  
鶴琴と倉橋惣三を中心に—」(『金城学院大学大学  
院人間生活学研究科論集』第5号, 2005年3月)  
を参照。